
惧れの箱

黒漆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

惧れの箱

【Nコード】

N0578G

【作者名】

黒漆

【あらすじ】

屋敷に住まう主人がある日、首吊りで見つかった。調査を行いに訪れる刑事が目にした意外な死の原因とは？

（前書き）

気分転換に短編書きました。

6月末日。その日は空は厚い雲が覆い日の光は遮られ、夏の訪れを先延ばしさせるような嫌な天気だった。梅雨はまだ明けておらず、重苦しい茹だる様な空気が体に纏わりつく。額を滑り落ちる汗をハンカチでふき取り、私はこの館の主人である男の、死体を見上げた。既に生物としての役目を果たしたそれは、梁からおろされたロープに首を通して時計の振り子の様にぶら下がっていた。

私は刑事であり、事件性の高い件を捜査することが仕事だ。しかし、今回についてはどうにも判断がつかないという理由により私が飯で呼び出されたに過ぎない。現時点で見たままの状況を判断すると、どうみても主人の自殺にしかつながらない訳だが、問題は彼が後生、生前の間欠かさずつけていた日記にあった。

彼の日記はそれこそ人生を凝縮させたと表現するに相応しいほど克明に記され、几帳面に居間の戸棚に並べられていた。それこそ100冊に達する勢いだ。いや、それ以上かも知れない。そのうちの一冊が居間の座敷机の上に置かれ、主人は首吊りで見つかった。そういう経緯であった。

主人の死を発見したのはこの家の家政婦だ、彼女は毎日定時にこの家の掃除と食事を作りにやってくる。本日、8時に定刻の通りやってきた彼女は挨拶をしても迎えに上がらない主人を不審に思い、居間へ上がると雇い主の哀れな成れの果てを発見するに至った。

この家の主人は変わった人間であった。人付き合いが極度に苦手な人間らしく、代々の先祖から受け継がれたこの広い家も持て余し気味だったそうだ。しかし、彼には物の先見を計る才能に望まれて

いた。それを利用して株や投資を行い、この家を維持し、なんとか食べていく事が出来るくらいには稼いでいたようだ。家政婦の話では自殺するといったそぶりは全く見せてはおらず、自殺の理由も全く思いつかないとの事だった。そこで私は物証であるこの日記を読む事とする。

6月6日

幼き頃、私は自宅の蔵へ厳格な父に閉じ込められた事があった。当時の私はまだ物を知らぬ小僧であり、目に映る全てが興味の対象であった。この家の近辺をうろつき田畑を荒らし、物の仕組みを知るために叩き壊したり、やりたい放題であったと思う。今思えば自分であっても目もあてられぬほどの悪童であった。それを父が嗜める為に蔵へと閉じ込めたのだ。暗く、恐ろしく狭い蔵の中で私は泣いた。それ以来、私は蔵が大の苦手となった。しかし、こうして晩年を迎えた頃、私はどうしてもあの蔵に足を踏み入れてみたくなった。そこには代々、私の先祖が残した色々な遺産が眠っているはずである。父が死して以来、あの蔵を開けるものは居なかった。私は明日、蔵を開ける事を決心した。

6月7日

開けた蔵の中は夥しい程の数の桐箱と堆く降り積もった埃に覆われていた。そんな中で私の目は部屋の端、一箇所へと吸い込まれるように固定された。そこには全く埃が積もっておらず、艶かしく鈍く光る、漆塗りの黒い箱が鎮座していた。興味を引かれた私はその箱を自宅へともって帰り中身を確かめる事とした。夜、座敷にて箱を明ける。箱には内蓋がついており、蓋にはしっかりと札で目張りが施されていた。私はこれまで好奇心とは無縁の生活を続けてきた、それは好奇心によって滅ぼされるもの達の姿を何度も目にしてきた

からだ。私の父も骨董で随分と損を繰り返していた。しかし、今の私は既に失うものは無い、この歳になって懼れが薄れてきているのやもしれない。目張りを剥がした所で私はこの楽しみを明日のために取って置こうと思い直す。急いだ所で私から箱は逃げて行きはしまい。

6月8日

私は、箱を開けた。あれは開けてはならぬ箱であった。父はあの箱の存在を知らぬまま逝ったのであろうか？私の父は蔵で首を吊った。それを私は骨董での失敗が元でと勘違いしていたのであろうか？確かに父が首を吊る前、骨董で大損をしていた。しかし・・・

6月9日

先日開けた箱の中身が頭から離れない。箱を蔵へと戻そうと何度も思ったが、私は私の中で沸き続ける好奇心にうち勝つ事が出来ないのだ。私が昨夜、箱を開けると中には何も無かった。本当に何も無いのだ、真つ暗な底なしの暗闇、手を差し入れても底に指先が触れる事もない。理解外の代物なのだ。やがて地の底を何かが這い回るような音が聞こえ始め、箱が振動を始めた。私は恐ろしくなっただけで箱を閉じたのだ。そんな箱を私はまた開こうとしている・・・

6月10日

箱から湧き出したものは大量の蜘蛛であった。私が大の苦手である、あの八本足の気味の悪い昆虫だ。それらが部屋中を占領しはじめ、黒の絨毯が出来上がる寸前で私は動かなくなる体を強引に動かし逃げようと腕を持ち上げる、途中箱の上に半分のみ開けた状態にしたまま乗せていた蓋に私の指が偶然かすめ、箱が閉じた。唐突に

露が畳に沁みこむ様に蜘蛛は忽然と消えた。そして、今日。湧き出したのは巨大な百足であった。私はしびれる腕をなんとか動かし、蓋を閉じた。

6月20日

私はあれから、何度か箱を開けている。徐々に湧き出る物の大きさが増している。それでも私は止める事が、抗する事ができずにいる。昨日は遂に私が幼き頃、嫌っていたがき大將があゝの時代、そのままの姿で現れた。恐らくもう、次に開けたら私は戻れないだろう。私は恐ろしい、私自身の好奇心の大きさが、そして次に現れる私の恐怖の対象が何で有るのかと思ひ浮かべている私自身が。

6月28日

私は開けてしまった、もう戻ることは出来ない。父が見たものが何であったか、私はやっと理解した。父には箱を目張りする程の気が残っていたという事実が、私の父への尊敬を蘇らせた。しかし、今更すでにどうでも良い事なのだ。私はもう死ぬ事しかできない。願わくばこの日記を読む事が出来た方に頼みたい。箱を処分して欲しい、私の代わりに処分して欲しい・・・

日記はそこで途切れていた、意味が解らないがそんな箱が本当に存在するのだろうか、存在などするはずが無い。そう思ったところで奥の座敷の襖が開いた。奥に並ぶのは全身が青く変色した、死んだはずの何人もの屋敷の主人だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0578g/>

惧れの箱

2010年10月28日03時47分発行